

+++++

「植物と人々の博物館メールマガジン」 第 19 号 2016 年 8 月 15 日発行

+++++

「借金なし大豆」はあまり発芽せず、出たものもキジバト夫婦に子葉を食べられて、ビールのつまみ枝豆程度も取れそうにないようです。その他のものはおおよそ順調で、スイカもメロンもなっています。レタス類はすでに定植、これからカリフラワー類、ハクサイを定植、カブ・ダイコン類を播きます。六条大麦、団子麦の丸麦を中川さんをお願いして西原の水車で搗精してから、希望者に差し上げます。下記にメールください。「おぼく」や「リゾット」にして食べるとおいしいです。今秋は播種しない予定です。

今日は敗戦記念日です。敗戦に向かうさなかに考え出され、戦後に大きな影響を与えている稲作単一民族説は柳田国男の大きな誤りです。中尾佐助も「コメは美味しいから、栽培をやめた民族はいない」、渡部忠世に至っては「コメ悲願民族」とまで書いていますが、これらも感情移入が過ぎます。日本では稲だけではなく、多様な穀物・いも・野菜などを食材としてきたのであり、「主食」という概念はなく、「稲（コメ）を主食」としたのは、ほんの第 2 次世界大戦後の一時期に過ぎません。恣意的に歴史事実をゆがめて、稲のみを神聖視して、コメさえ作れば良い、他の食料（コメすら含む）は輸入すれば良いとした農業政策を推進した結果、そのコメさえも減反し、国内需要が減少、食料自給率は最悪の状態になっています。専業農家はごく少なくなり、減反という後ろ向きの政策に補助金を出したので、兼業農家は生産意欲と職業的誇りを低下させたと思います。柳田の稲作単一民族説は農業を大切に思っている大方の市民も呪縛しています。

たとえば、熱意ある市民の主張の趣旨には賛成ですが、コメが国土に根ざすすべてだと認識している点、いつまでも地域独自性を創造しない「日本版」の舶来志向には、賛成できません。引用：「だから、“NO RICE/NO PEACE” <米を食べよう！米を作ろう！> 国土に根ざして暮らすことが、なによりの平和なのですから。* 第 2 回脱成長シンポは、都市生活者の米づくりを核にして、経済成長依存社会からフェーズアウトしていく具体策を考える。日本版アグロエコロジーの奨めキャンペーンの準備会合も兼ねています。

会員および配信を希望される方に公開活動ニュースなどをお送りしています。ご関心のあるご友人に転送などでご紹介いただき、「辺境」の地道な活動に薄情な「マスコミ」ではなく、顔見知り信頼の「ロコミ」で転送伝達していただけるとうれしいです。連絡先は下記メールアドレスです。

○報告

1. 雑穀見本園の様子： キビ・アワは順調に育っています。見本園でも順調です。特にモロコシの生育は良いです。播き直したキノアは良好です。

藤野駅北の畑はホーム 3 号車の位置、藤野倶楽部看板の向こうに見えます。

2. トランジション・タウン小金井の梶間さんに TT 小菅、TT 藤野と連携協働することをお願いしました。

3. 伝統知研究会の成果を出版できないか、農文協の担当者に検討を依頼しました。自給知足する兼業農家、小規模家族農耕、市民支援農耕、市民農園などの持続・拡大は、大規模専業農家化と同時進行すべき、統合的な必要政策です。良い農業関係書を出版している農文協の社外理事をしています。出版不況で経営は厳しいです。農家だけでなく、都市民が家族と地域社会、自然と農山漁村の暮らしをよくする仕事を進めるために、先人の知恵を蓄積した良書を読み、自ら考えることが必要です。良い農業書を買って支えてください。

4. インドで雑穀研究の国際雑誌を国際雑穀フォーラムが本年から発行するようです。シタラム博士とのおつきあいで連絡がありました。

アメリカの NativeSeeds/SEARCH が必要とするなら、海外ボランティア・アドバイザーをするつもりです。

5. 東京都公園協会の講座「目から鱗、雑穀の世界」を、2017年1月7日に依頼されました。正月早々、聴講者がいるとも思えませんが、せっかくの機会ですので、最近の考えなどでpptスライドを準備します。そういえば、先月は、農芸高校で大学進学講座をしました。数人は熱心に聞いてくださったようなので、若い新規就農者が出てくださるとうれしいです。

○予定

展示解説・作業予定日：8月は16日(水)、22日(月)を予定、天気予報を見て決めます。9月は、3日(土)、9日(金)、16日(金)、23日(金)、30日(金)の予定です。年に1日、月に1日でも、未来への遺産である民具や図書の整理を一緒にいただければありがたいです。

参加希望者は木俣にメールしてください。kibi20kijin@yahoo.co.jp

1. 第38回環境学習セミナー

(再々掲、佐々木さんのお話は面白いし、役立ちます。ぜひご参加ください。)

『自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習(冒険学校)』

日時：2016年9月3日(土)～4日(日)

場所：山梨県小菅村役場および中央公民館、自然文化誌研究会拠点のキャンプ場(小菅村内)

参加費：資料代など1,000円(小菅村民無料)、懇親会参加費2,000円

宿泊費：キャンプ場：1泊朝食(自炊)で2,000円 旅館：1泊朝食で6,500円

連絡問合先：NPO 法人自然文化誌研究会 事務局 黒澤友彦

e-メール npo-inch@wine.plala.or.jp Tel:0428-87-0165<携帯 090-3334-5328

主催： NPO 法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミュージーズ研究会

共催： NPO 法人 ECOPLUS 、協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

※この事業は 公益財団法人 国土緑化推進機構 「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて実施します。

趣旨：

自然文化誌研究会は、秩父多摩甲斐国立公園とこの周辺にある山村で環境学習活動／冒険学校や雑穀調査研究、これらの成果を応用して、エコミュージアム日本村／トランジション小菅など、山村維持の取組みを 40 年あまり続けてきました。現在、精神性さえもがデジタル化されようと大きく変わりつつある世界のなかで、自然とつながるアナログ的な伝統的知識・技能が過疎高齢化によって決定的に失われようとする変曲点にあります。現実世界が仮想世界に蔽われようとするこの時代に、私たちアナログ自然・文化好きの冒険人たちはこの巨大な趨勢にどう抗うのか。自然と直に向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再習得しながら、私たちが生活する人生を深く考えるために、親密な話し合いの場を一緒にしましょう。自然学校・冒険学校などで培ってきた経験の蓄積を学び直し、私たち市民がこのくにをどのように再創造しながら、未来に向けて実体のある生活様式をどのように維持するのか、ともに学び、考えるためのセミナーにしたいと思います。

プログラム：

9 月 3 日（土） 昼の部～会場は 小菅村中央公民館

12:30 ～ 受け付け開始

13:00 ～ 13:20 趣旨案内と挨拶 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

13:20 ～ 14:20 「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」 佐々木豊志さん（くりこま高原自然学校）

山村で自然学校を経営ながら、2008 年「岩手宮城内陸地震」に遭遇して非常時の環境学習（サバイバル）の意味を、身をもって示した。さらに、この経験を活かして、東日本大震災が起こった時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ緊急支援体制を構築した。

最近、世界的にも、自然学校がいわゆる「デイズニー化」しており、冒険心まで演出されることを危惧している。幼少期の自然体験の重要性から森のようちえん、さらに、自足可能な暮らしを想像するために森林資源利用から木質バイオマス、馬搬など復権と取り組んでいる。

14:30 ～ 15:30 「小菅村の自然、知恵と技能」 木下善晴さん（建設業・小菅村 80 代） 加藤源久さん（自然ガイド・小菅村 60 代）

15:40 ～ 16:40 意見交換会

テーマ：人生が冒険でなかったら、どこに生きる意味があるのか。困難に挑戦してこそ面白い人生だ。

16:40 ~ 17:00 まとめ 中込卓男

18:30 ~ 24:00 自然文化誌研究会拠点のキャンプ場（小菅村内）

※当日夜は、小菅村小永田地区の伝統芸能である「神代神楽」が奉納されます、希望者は見学ができます。

9月4日（日） 8:30 ~ 11:30 伝統技能実技講習 講師：木下善晴さん、加藤源久さん

2. シンポジウム「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」の企画準備状況

（企画につき良いアイデアがありましたら、お知らせください。）

第39回環境学習セミナーを、伝統知共同研究の成果発表のために、企画しています。7月27日に藤野で世話人会の準備について話し合いました。現在は下記のところまで予定しています。来春のことですが、ご予約に入れていただき、厚志による実りある、ゆったりとした話し合いの場にしたいと思います。ご友人に転送・転載などご助力ください。よろしくお願いします。

日時：2017年4月15～16日（土日）1泊2日、日帰り参加もよい。

場所：神奈川県相模原市緑区、藤野地区の「篠原の里」ほか。

宿泊：「篠原の里」、藤野倶楽部「無形の家」ほか

参加費：実費程度

主催：自然文化誌研究会、ECOPLUS（伝統知共同研究）

共催：エコミュージアム日本村（トランジション小菅）／ミューゼス研究会ほか

藤野世話人会

趣旨：

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っています。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに保全されていることが明らかになってきています。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この智恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会が極めて有効です。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要があります。本事業では、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきました。

本シンポジウムでは、事業成果の報告とともに、社会的に成果を位置づけるために基調講演と他の先進事例紹介を行い、農山村と都市からの参加者ともに、生活における伝統知や

技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて幅広く話し合いたいと思います。幸いなことに、開催地藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし（sobibo）へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されています。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見したいと思います。

内容：

- 1) 基調講演：現代文明の移行と伝統知・生業（仮題）
設楽清和さん（パーマカルチャー・センター）
榎本英剛さん（トランジション・タウン藤野）
高橋靖典さん（藤野倶楽部）
- 2) 伝統知共同研究報告 研究メンバーからの報告
- 3) 座談会風の総合討論
- 4) ポスター発表展示 参加者から募集
- 5) 交流会（夕食懇親会）

3. 日本村塾ゼミ 日程は 10 月頃まで未定

ご意見をお知らせください。

1) 自給農耕ゼミ第 7 回； 藤野の雑穀畑を観察しながら、読書会はいかがでしょう。末村さん、宮本さん、よろしくご検討ください。

ホルムグレン著『パーカルチャー』（上・下）を推薦したいです。内容が濃いので、議論しながら読むのが良いと思います。

2) 民族植物学ゼミ第 3 回； 希望者があれば、10 月になってからでも読書会を松戸近くで再開したいです。

3) 扶桑くにゼミ第 3 回； 希望者があれば、日本国憲法についてテキストをもとに話し合ってみたいと思います。

『民族植物学ノオト』第 10 号に私論を掲載しました。

4. 民族植物学第 10 号 編集中、発行は初秋を予定しています。なお、第 11 号の原稿締め切りは 2017 年 3 月末予定です。

自然文化誌研究会（東京都日野市）：代表 中込卓男、副代表 中込貴芳、小川泰彦
ミューゼス研究会／トランジション小菅（山梨）：代表 青柳諭、副代表 亀井雄次
事務局：黒澤友彦（小菅村在住） npo-inch@wine.plala.or.jp
植物と人々の博物館：館長 木下善晴（小菅村在住）

日本村塾生・研究員：木俣美樹男（東京）、西村俊（石川）、藤盛礼恵（千葉）ほか

連絡先：木俣美樹男 kibi20kijin@yahoo.co.jp

公式 HP：植物と人々の博物館 <http://www.ppmusee.org/>

自然文化誌研究会 <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

個人 HP：生き物の文明への黙示録 <http://www.milletimplic.net/>